

「21 世紀の日本と世界」

ブルース・L・バートン

1996.3.19 放送

今回は、日本の将来について考えてみたいと思います。21 世紀まであと 4 年しかありませんが、来る世紀において日本はどのような状況にあり、どのような姿勢や行動をとるべきか。若干抽象的ですが、とても重要なテーマだと思います。

未来を語るためには、まず歴史に対する正しい理解が不可欠です。その国が歩んできた道をよく知れば、将来への見通しもある程度付くはずだからです。20 世紀の日本の歴史と言えば、1945 年における日本の敗戦を重視する人が多いでしょう。昨年は終戦 50 周年という事でマスコミなどが積極的にこの問題を取り上げ、敗戦やその後の国内改革が現代日本にとってどれだけ大きな意味を持つかという事が改めて問われました。

しかし日本史全体を考える場合は、日本の敗戦は、より長い歴史的プロセスを一時的に中断させた事件に過ぎないという見方もできます。その歴史的プロセスとは、アジアでも周辺的な一国だった日本が世界的な大国に、つまり周辺から中心へと成長していった歴史的過程です。江戸時代までの日本は、アジアの中でも、大国とはいえない存在でした。そういった国が明治以降の百数十年間に様々な紆余曲折を経ながらも、アジアのみならず世界中に大きな影響力を行使し得る大国へと成長してきました。

日本が中心国になりえた理由については、歴史学者の間でも定説はありませんが、大まかに言って、外的要因つまり日本が置かれた国際環境と、内的要因つまり国内の事情に分けて考えることができると思います。

日本の発展の外的要因としては、成長の見本となり得た欧米先進国の存在と、日本の成長を促した地理的或いは国際政治的環境が挙げられます。島国であるということが、外敵に妨げられない、安定した発展を促したと思われまし、戦後についてはアメリカとの安全保障体制やガットなどによる安定した国際貿易体制が続いたことが経済的発展に貢献したことも言うまでもありません。

次に発展の内的要因としては、日本特有の国民性或いは社会の仕組みが挙げられます。なかでも重要なのは、日本人のいわゆる集団主義なところや、日本社会全体の均質性、そしてこれらの特徴をうまく利用し、方向付けした国家の存在などでしょう。要するに、日本が比較的にとまりやすい国で、それが明治以来の成長・発展に大きく貢献した、というわけです。

それに少なくとも戦前までは、日本社会の未熟さそのものも有利に働いたと言えます。他の後進国と同様、日本は若者を中心とした人口構造、比較的安い賃金水準など、当時の国際競争を勝抜く諸条件を揃えていましたし、色々な意味で、社会的に或いは経済的に伸びる余地を残していました。

日本の近現代史の流れというのは、第二次世界大戦という大きな迂回路を通りながらも、

これらの内的・外的、両面の条件が重なって、日本を現在のような大国に築き上げていった過程である、と考えるいいと思います。

ではこれらの見通しはどうでしょうか？同じような分析法を使って考えましょう。

まず日本の発展を後押ししてきた国際環境ですが、結論からいえば、将来、今までの諸条件が以前のようにうまく揃うことはないでしょう。日本が欧米並の先進国となっている以上、将来の発展モデルとなる他国はもはやありませんし、今まで日本を世界の荒波から守ってくれた国際政治的条件もこれからあまり期待できないでしょう。

例えば、アメリカによる安全保障は、米国内の経済問題や、去年の沖縄事件で表面化した日本側の反対によって、次第に形骸化していく可能性は大きいと思われます。しかしそうなった場合、日本の安全保障はどうなるのでしょうか。最近の中国の動きに象徴されるように、いつまでも平和な世の中とは限らないから少し心配です。

安全保障の問題を別にしても、21世紀には、世界人口の増加、環境の破壊、資源の消耗など、地球規模の問題がますます深刻になりそうです。見通しが付かないだけでなく、交通・通信における技術の進歩によって、世界の一体化が急ピッチで進み、各国が自らの意志とは関わりなく世界の風をまろに受けざるをえなくなります。日本も例外ではありません。今までのような生温い、保護された環境とは大違いです。

次に国内の事情を考えたいのですが、ここも大きな転換期にきています。日本は他の先進国と同様、社会や経済が既に成熟したことから、更なる発展の余地は限られています。今問題になっている社会の高齢化がその典型的な例でしょう。また、日本特有の「まとまり易さも」、社会や市民意識の多様化によってなくなりつつあります。これも基本的に社会の成熟や先ほど言った世界の一体化或いはボーダーレス化の結果です。

今までの発展を支えた内的・外的要因がこの先うまく揃わなくわけだから、日本の将来を悲観する人も当然出てくるでしょう。しかし、私は逆にもっと明るい将来像が描けるように思います。なぜなら、内的・外的条件が絶対に変わってはいけないということはなく、外的要因が変われば、内的要因もそれに合わせて変わればよいという考え方もできるからです。

ここで注目しておきたいのは、先ほどいった日本社会の多様化です。多様化と一口に言っても、様々な形をとります。例えば、若い人たちと中年・高齢者との間の生活様式・考え方の違い、つまりゼネレーション・ギャップの拡大、社会における女性あるいは外国人その他のマイノリティーの進出、従来の自民党の単独政権に替わる連立政権の誕生、あるいは今までの東京一極集中に替わる地方分権や地域文化の活性化などなどです。

この多様化によって日本という国のまとまり易さが確かになくなり、ある意味で社会の安定性も損なわれるかも知れません。

しかし、総じて言えば、日本社会の多様化・多元化は歓迎すべきです。世の中がこれからどう変わっていくか分からない時代だからこそ、色々な生き方・考え方が要求されます。多様化が進めば進むほど、日本の社会は柔軟なものとなり、急激に変わる世界情勢に対応

していく潜在能力がついていきます。

要するに、新しい時代に対応するために、日本は国外・国内で起きている変化を積極的に受けとめることが必要です。今まで日本は、国家の指導のもとで外との壁を高くし、守られた空間のなかで均質的な社会を作り上げ、独自の方法で発展してきました。しかし、こうしたやり方はもはや通用しないはずで、折角築き上げた国際的地位を維持するために、日本は今までの画一的な管理社会から、さまざまな価値観が共存できる自由社会へと変わらなければなりません。急変する世の中で、こうした柔らかさこそが真の強みになるはずで、

では。